

日蓮大聖人御書全集

げんこうごしよ

減劫御書

新版
1966
ゝ
1969

げんこうしよ

減劫御書

けんじがんねん

まつ

どう

ねん

さい

さい

建治元年(75)末または同2年(76)

54歳または55歳

たかはしろくろうひようえ えんじや

高橋六郎兵衛の縁者

げんこう

もう

ひと

こころ

うち

そうろう

とん

じん

ち

さんどく

しだい

減劫と申すは人の心の内に候。貪・瞋・癡の三毒が次第

けうじよう

成

しだい

ひと

命

縮

に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちもつづま

背

小

罷

り、せいもちいさくなりもてまかるなり。

かんど

にほんこく

ぶつぼういぜん

さんこう

ごてい

さんせいとう

げきよう

漢土・日本国は、仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外経

たみ

こころ

調

世

おさ

しだい

をもつて民の心をととのえてよをば治めしほどに、次第に

ひと

こころ

善

果

無

悪

賢

人の心はよきことははかなく、わるきことはかしこくなり

しかば、げきよう外経の智あさきゆえに、あく悪のふかき失をいましめ

がたし。げきよう外経をもつて世おさまらざりしゆえに、よようやく

ぶつきよう仏経をわたして世間をおさめしかば、せけん世おだやかなりき。

これはひとえに、ぶつきよう仏教のかしこきによつて人民の心を

詳明くわしくあかせるなり。

とうじ当時の外典と申すは、もう本の外経の心にはあらず。ぶつぽう仏法の

渡わたりし時は外経と仏経とあらそいしかども、ときようやく

げきよう外経まけて王と民と用いざりしかば、おう外経のもの、たみ内経の

しよじゆう所従となりて、た立ちあうことなくありしほどに、合外経の

ひとびと　ないきよう　こころ　抜　ちえ　増　げきよう　い　そうろう

人々、内経の心をぬきて智慧をまし、外経に入れて候を、

愚　おう　げてん　賢　思

おろかなる王は外典のかしこきかとおもう。

ひと　こころ　漸　ぜん　ちえ　果　無　あく　ちえ

また、人の心ようやく善の智慧ははかなく悪の智慧

賢　ぶつきよう　なか　しょうじようきよう　ちえ　せけん

かしこくなりしかば、仏経の中にも小乗経の智慧、世間

治　よ　とき　だいじようきよう

をおさむるに、代おさまることなし。その時、大乘経を

弘　よ　よ　のち

ひろめて代をおさめしかば、すこし代おさまりぬ。その後、

だいじようきよう　ちえ　およ　いちじようきよう　ちえ　取　出

大乘経の智慧及ばざりしかば、一乗経の智慧をとりい

よ　よ

だして代をおさめしかば、すこししばらく代おさまりぬ。

いま　よ　げきよう　しょうじようきよう　だいじようきよう　いちじようほけきようとう

今の代は、外経も小乗経も大乘経も一乘法華経等

も、叶 世かなわぬよとなれり。故ゆえいかなとなれば、衆生の貪しゆじよう とん・

瞋・癡の心のかしこきこと、じん ち こころ 賢大覚世尊の大善にかしこきが

ごとし。たと譬えば、犬は鼻のかしこきこと人にすぎたり。ま

た鼻の禽獸をかぐことは、はな きんじゆう 嗅大聖の鼻通にもおとらず。

ふくろうがみみのかしこき、鼻 耳とびの眼のかしこき、鳶 まなこすずめ

の舌のかろき、した 軽りゅうの身のかしこき、竜 みな皆かしこき人にも

すぐれて候。勝 そうろうそのように、まつだいじよくせ こころ とんよく しんに末代濁世の心の貪欲・瞋恚・

愚癡のかしこきは、ぐ ち けんじん しょうにん おさいかなる賢人・聖人も治めがたきこと

なり。

ゆえ とんよく ほとけ ふじようかん くすり じ しんに

その故は、貪欲をば、仏、不浄観の薬をもつて治し、瞋恚

じ ひかん じ ぐち じゆうにいんねんかん

をば慈悲観をもつて治し、愚癡をば十二因縁観をもつてこ

じ たも ほうもん 説 ひと 落

そ治し給うに、いまはこの法門をといて、人をおとして、

とんよく しんに ぐち 増

貪欲・瞋恚・愚癡をますなり。

たと ひ みず 消 あく ぜん

譬えば、火をば水をもつてけす。悪をば善をもつて打つ。

みず い ひ みず 掛

しかるに、かえりて水より出でぬる火をば、水をかくれば、

油 たいか

あぶらになりていよいよ大火となるなり。

いま まつだいあくせ せけん あく しゅつせ ほうもん だいあく

今、末代悪世に、世間の悪より出世の法門につきて大悪

しゅつしよう 知 いま ひとびとぜんこん 修

出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれば、

いよいよ代よのほろぶること出来しゅつたいせり。今の代いまの天台・真言等よ てんだい しんごんとう

しよしゅう そうとう

養

げ ぜんこん

み

の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれども、

うち じゅうあくごぎやく

過

だいあく

内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり。

よ 治

だいかくせそん ちえ

しかれば、代のおさまらんことは、大覚世尊の智慧のご

ちじんよ

あ

せんよこくおう

けんおう

寄

とくなる智人世に有つて、仙予国王のごとくなる賢王とよ

合 いっこう ぜんこん

止

だいあく

はつしゅう

ちじん

りあいて、一向に善根をとどめ、大悪をもつて、八宗の智人

思 者

責

流

とおもうものを、あるいはせめ、あるいはながし、あるい

施 止

こうべ

刎

よ 少

治

はせをとどめ、あるいは頭をはねてこそ、代はすこしおさ

そうち

まるべきにて候え。

ほけきよう　だいいち　まき　しよほうじつそう　ないし　ほとけ　ほとけ

法華經の第一の卷の「諸法実相」乃至「ただ仏と仏と

よ　くじん　説　そうろう

のみ、いまし能く究尽したまえり」ととかれて候はこれ

ほんまつくきよう　もう　ほん　あく　根ぜん　ね　まつ

なり。「本末究竟」と申すは、「本」とは悪のね善の根、「末」

もう　あく　終　ぜん　お　ぜんあく　こんぼんしよう

と申すは悪のおわり善の終わりぞかし。善悪の根本枝葉を

覚　きわ　ほとけ　もう

さとり極めたるを仏とは申すなり。

てんだい　そ　いっしん　じつぽうかい　ぐ　とううんぬん　しようあん

天台云わく「夫れ、一心に十法界を具す」等云々。章安

い　ほとけ　だいじ　なん　げ　やす

云わく「仏これをもつて大事となす。何ぞ解し易きことを

う　みようらくい　すなわ　しゅうぐくきよう　ごくせつ

得べけんや」。妙楽云わく「乃ちこれ終窮究竟の極説なり」

とううんぬん　ほけきよう　い　みなじつそう　あいはい　とううんぬん　てんだい

等云々。法華經に云わく「皆実相と相違背せず」等云々。天台

これを承けて云わく「一切世間の治生産業は、皆実相と相

いはい
とううんぬん

違背せず」等云々。

ちしや
せけん
ほう
ほか
ぶつぼう
おこな
せけん
ちせい

智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世の

ほう
よ
よ
こころ得
そうろう
ちしや
もう

法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。

いん
よ
にこ
たみ
煩
たいこうぼうしゅつせ
いん

殷の代の濁つて民のわずらいしを、太公望出世して殷の

ちゆう
くび
き
たみ
歎
止
にせいおう
たみ
くち
苦

紂が頸を切つて民のなげきをやめ、二世王が民の口ににが

ちようりようい
よ
治
たみ
くち
甘

かりし、張良出でて代をおさめ民の口をあまくせし、こ

ぶつぼういぜん
きようしゅしやくそん
おんつか
たみ

れらは、仏法已前なれども、教主釈尊の御使いとして民を

助
げきよう
ひとびと
知
かれ

たすけしなり。外経の人々はしらざりしかども、彼らの

ひとびと

ちえ

ないしん

ぶつぽう

ちえ

差

挟

人々の智慧は、内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。

いま

よ

しょうか

おおじしん

ぶんえい

だい

彗

星

とき

ちえ

今の代には、正嘉の大地震、文永の大せいせいの時、智慧

賢

こくしゆ

にちれん

もち

かしこき国主あらましかば、日蓮をば用いつべかりしなり。

ぶんえいくねん

同 士 打

じゅういちねん

もうこ

それこそなからめ、文永九年のどしうち、十一年の蒙古の

攻

とき

しゅう

ぶんおう

たいこうぼう

迎

いん

せめの時は、周の文王の太公望をむかえしがごとく、殷の

こうていおう

ふえつ

しちり

しょう

高丁王の傳説を七里より請ぜしがごとくすべかりしぞか

にちがつ

しょうもう

たから

けんじん

ぐおう

憎

し。日月は生盲の財にあらず。賢人をば愚王のにくむと

繁

故

記

ほけきょう

みこころ

もう

は、これなり。しげきゆえにしるさず。法華經の御心と申す

体

そうろう

ほか

思

は、これていのことにて候。外のこととおぼすべからず。

だいあく

だいぜん

きた

ずいそう

いちえんぶだい打

乱

大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすなら

えんぶだいない

こうりようるふ

えんぶだい

うち

ひろ

るふ

ば、「閻浮提内、広令流布（閻浮提の内に、広く流布せしむ）」

うたが

そうら

は、よも疑い候わじ。

だいしんのあじやり

ころくろうにゆうどうどの

おん

墓

遣

この大進阿闍梨を故六郎入道殿の御はかへつかわし

そうろう

昔

ほうもん

き

そうろうひとびと

かんとう

うち

候。むかしこの法門を聞いて候人々には、関東の内な

われ

行

墓

じがげ

そうら

ぞん

らば、我とゆきてそのはかに自我偈よみ候わんと存じて

そうろう

とうじ

有

様

にちれん

行

候。しかれども、当時のありさまは、日蓮かしこへゆく

ひ

いつく

聞

鎌

倉

騒

ならば、その日に一国にきこえ、またかまくらまでもさわぎ

そら

はら

ひと

行

ひと

候わんか。心ざしある人なりとも、ゆきたらんとおころの人、

ひと目

恐

訪

そら

しょうりよう

人めをおそれぬべし。いままでとぶらい候わねば、聖霊

恋

有

様

いかにこいしくおわすらんとおもえば、あるようもありな

でし

遣

おん

墓

じがげ

読

ん。そのほど、まず弟子をつかわして、御はかに自我偈をよ

よし

おんこころ得そら

きようきようきんげん

ませまいらせしなり。その由、御心え候え。恐々謹言。